いう慣習によると思われる。

二つ目は、その歴史性である。薩摩焼は文禄・慶長の役（一五九二～九八）に出陣した島津軍により連行された朝鮮人陶工によって創始され、二代藩主島津光久（一六一六～九五）の時代に、朝鮮人陶工らの集住地に位置づけられた苗代川で朝鮮風俗化の統制が実施され、それ以降江戸時代を通じて保持された。また、御仮屋が設けられ、参勤交代の折には藩主が宿泊し薩摩焼の技術や朝鮮式の神舞が披露された。[14] こうした政策の実施は、鎖国下にあって琉球を介して中国と貿易を行っていた薩摩藩が、朝鮮半島とのつながりにも価値を置いた結果と推測される。このように、薩摩焼は海外に開かれた島津家の歴史を内包する存在であるとともに、島津家が江戸時代を通じて育んできた国産品であった。それゆえ、藩政時代から島津家の伝統と格式を伝えるにふさわしい贈呈品と考えられたのではなかろうか。

三つ目は、当時の薩摩焼をとりまく状況である。忠義の認識もまた、薩摩焼を贈呈する理由になったと推測される。薩摩焼のなかでも白薩摩は島津家の主導により、江戸時代を通じて象牙色の肌に微細な貫入のある素地へと収斂されたもので、その素地に調和する絵付けが施された錦手焼は、極めて希少性の高い御用品であった。これが後に薩摩錦手として海外で好評を博すことになるが、明治期に入ると、本来の薩摩錦手とは隔たりのある、他産地で製造された薩摩様式の製品が「SATSUMA」として海外に大量に輸出されていた。

忠義はニコライに薩摩焼を贈呈した四年後の明治二十八年、磯島津邸内に第一次仙巌窯を築き、自ら意匠などを工夫するに至るが、忠義が著した『薩摩陶器の起源』（明治二十九年）に「粗製乱造愈々自出し、遂に以て薩摩陶器の名誉地に墜ちんとす」という状況を憂い、島津家が育んだ本来の薩摩焼を再生させようと試みたことが記されている。忠義が憂いた薩摩焼をとりまく状況はすでに明治初期から現れていたことから、ニコライへの薩摩焼の贈呈には、島津家が育んだ薩摩焼本来の美を伝える意味が込められたものと考えられる。素地を十分に活かした、素地と絵付けが調和した花瓶の贈呈はその証左といえよう。

四　なぜ沈壽官窯に注文されたのか

田之浦陶器製造所がニコライ一行の視察先になっていたことについては前項で述べた。それにも関わらず、島津忠義はわざわざ苗代川の十二代沈壽官に献上品の製作を依頼した。ここではその経緯について明らかにしたい。

（一）藩窯の終焉と十二代沈壽官の台頭

そもそも、薩摩焼の生産は薩摩藩（島津家）が主導してきたものであり、とりわけ錦手焼に関して言えば、城下竪野の藩窯と苗代川の御用窯（御定式窯）のごく限られた場所で、限られた人と技術により、希少性の高い奢侈品として育まれてきたものであった。幕末期に、藩主島津斉彬（一八〇九～一八五八）が薩摩焼の海外輸出を意図して上絵付けの改良研究を行い、その成果を藩窯の主取（責任者）星山仲次（七代金貞信）と苗代川の朴正官（後に錦手主取）に伝授したのも、その流れに沿ったものである。その後、廃藩置県を機に、藩窯は田之浦陶器会社に、苗代川の御用窯は苗代川陶器会社へと転換するが、両会社は島津家が出資し鹿児島県が主宰した、いわば公営の会社であった。しかし明治十（一八七七）年に西南戦争の影響を受けて倒産に至っており、島津家が一七〇年余りに渡って主導してきた薩摩焼の生産体制は終焉した。[15] 明治二十四年にニコライ一行が訪れた田之浦陶器製造所は、民間人が経営する、島津家とは縁のない会社となっていたのである。

ここで、斉彬から錦手技法を伝授された星山家と朴家の明治期の状況についてみてみよう。星山家は朝鮮人陶工の初代金海が星山仲次の名を拝領し、それ以降、藩窯の責任者を務めてきた家柄であったが、七代金貞信（星山仲次）が田之浦陶器会社に勤務したものの、跡を継いだ八代金貞信は明治に至って御城下警察隊兵士となり、製陶家としての星山家は途絶えた。[16]

一方、朴正官はその後錦手方主取となり、慶応三（一八六七）年のパリ万国博覧会に薩摩藩が出品した錦手大花瓶の製造を手掛けた。しかし、正官が明治七年に没した

後は長男朴利行、次男朴義通が明治十年に東京で薩摩焼の営業を行ったものの二年後に閉店[47]、その後利行は沈壽官窯の職工となっている。

続いて、十二代沈壽官についてみてみよう。藩政時代に藩営陶器場の工長を務め、廃藩置県後に設立された苗代川陶器会社でも引き続き工長を務めており、明治六年のウィーン万国博覧会に際しては、陶器輸送方として鹿児島県が出品する陶器を東京へ輸送し、その後一年間滞在して全国の出品物の視察や諸県の陶器製造家らと交流した[48]。ウィーン万博では、沈壽官の錦手大花瓶が賞賛を得て薩摩焼の国際的信用は定まったとされる。苗代川陶器会社が瓦解同然となったのを機に職を退き、明治八年に薩摩焼初の民営会社となる玉光山陶器製造場を創業し翌年から海外輸出に参入、同十二年には東京支店を構えている[49]。

藩窯を受け継ぐ会社や関係者が離散する一方、台頭したのが十二代沈壽官であった。その活躍は明治二十九年に没するまで続き、国内外の博覧会で受賞を重ね（表3）、鹿児島産薩摩焼の海外輸出を牽引した。

（二）島津家と十二代沈壽官

ここで島津家と十二代沈壽官の関わりについて、沈壽官家文書を通してみてみよう。同文書の中に十二点の関連する史料を認めることができ、島津家に直接関わる史料が明治十四（一八八一）年から大正十一（一九二二）年の間に八点、年代が不明のものが四点、島津家袖ヶ崎邸家令の注文に関するものが一点ある。

このうち、明治十四年八月付で東京の袖ヶ崎邸家令の内田政風から沈壽官に送られた書簡が最も早い時期のものである。（挿図7）

この年の五月九日、明治天皇が島津忠義の麻布の別邸及び袖ヶ崎邸を行幸し、続いて五月十二日には皇太后と皇后が袖ヶ崎邸を行啓した[50]。内田からの書簡は、皇太后・皇后が袖ヶ崎邸を行啓された折に島津忠義が錦手陶器を献上したところ、それを製作した沈壽官に対して金千疋と紺細上布が下賜されたことを伝える内容である。行啓の当日は月録をもって献上し、その後図形（下絵図）を元に製作が行なわれ、およそ二ヶ月後の八月に完成品が贈呈されたようである。書簡には、「御品柄格別丹誠ヲ凝候もの与和兄得、古式ヲ不失純粋出来上り、御献上被遊候而も薩摩焼之名ヲ不下物与、段之事ニ思召御満足被遊候」とあり、沈壽官が薩摩焼の本質を失わず格別の製品を献上したことに対する賛辞が述べられている。「古式ヲ不失」や「薩摩焼之名ヲ不下物」といった言葉は、全国各地で薩摩様式の製品が製造され、江戸時代に育まれた薩摩焼（薩摩錦手）とは作風の異なる製品が「SATSUMA」として大量に輸出されていた当時の状況が背景にあると考えられ、薩摩焼の正統を重んじる姿勢がうかがえる。

年代	西暦	受賞歴	出品物■審査評
M14	1881	第二回内国勧業博覧会（褒状）	**置物**「遊船楽ヲ奏シ寶船福神ヲ載ス、此ノ二個ノ置物意匠少シク疎**ナルガ**如シト雖トモ船體及ヒ船首ノ竜鳳佳巧ニシテ焼成完全ナリ、老熟ノ技ヲ覩ルニ足レ頗ル嘉ス」
M18	1885	繭絲織物陶漆器共進会（四等賞）	陶器　袋形茶具
M18	1885	繭絲織物陶漆器共進会（功労賞）	
M23	1890	第三回内国勧業博覧会（二等有功賞）	**内附皿 菊花式、花瓶 蓮蝋**「甲ハ工作卿重ニシテ使用ニ適シ、乙ハ製形至難ナルモ苦窟ノ弊ナシ、共ニ熟手ニ非サレハ此ニ到リ難シ、其有功甚タ嘉賞ス可シ」
M24	1891	美術展覧会（褒状一等）	**薩摩焼鳥籠形香炉**「彫透織巧ニシテ磁質モ亦佳ナリトス」
M26	1893	シカゴ万国博覧会	
M28	1895	第四回内国勧業博覧会（妙技三等）	**陶器竹籠式花瓶**「工手善ク熟シテ彫刻精緻、編竹ノ整齊真ニ逼テ清雅ナリ」
M28	1895	第四回内国勧業博覧会（褒状）	陶器花瓶
M30	1897	連合共進会（二等褒賞）	**浮彫花瓶 白地**
M30	1897	創設廿五年紀念博覧会（有功銀牌）	陶製香炉
M30	1897	創設廿五年紀念博覧会（出品紀念）	陶磁器
M30	1897	第一回鹿児島県管内米外八品品評会（一等賞）	花瓶
M31	1898	美術展覧会（二等賞銀牌）	**薩摩陶浮彫花瓶**　大瓶一雙、小瓶一隻「俱ニ精細ノ彫鏤ヲ施ス、日子ヲ惜マスシテ此製作アリ、慣熟ノ技ヲ覩ル」
M33	1900	第5回パリ万国博覧会（銅牌）	
M33	1900	鹿児島県重要物産品評会（一等賞）	陶磁器
M34	1901	緑綬褒章　日本帝国褒章之記	
M34	1901	連合共進会（二等褒賞）	**籠形置物**
M34	1901	第一回全国窯業共進会（二等賞銀牌）	**陶製古銅紋彫刻花瓶**
M34	1901	第十六回協技会（三等賞銅牌）	**陶白地透彫香炉**
M34	1901	五二会臨時品評会（三等賞銅牌）	筒形香炉
M35	1902	ハノイ東洋諸国博覧会（一等賞金牌）	
M35	1902	第二回全国製産品博覧会（名誉牌）	審査嘱託における尽力に対する感謝状
M35	1902	第二回全國製産品博覧會 宮内省御買上ケ（薩摩焼香炉）	薩摩焼香炉「右ハ本會ニ御出品ノ處、今般　宮内省ヘ買上ケ相成候條、此段及御通知候也」
M35	1902	第十七回競技会（褒状一等）	**薩摩焼浮彫花瓶**
M35	1902	美術展覧会（三等賞銅牌）	**薩摩焼浮彫花瓶**
M36	1903	第五回内国勧業博覧会（三等賞牌）	陶器各種
M37	1904	セントルイス万国博覧会（銀牌）	
M37	1904	第三回全国製産品博覧会（三等賞有功銅牌）	陶器各種
M37	1904	内国製産品評会（三等賞牌）	陶器各種
M37	1904	戦時紀念五二会品評会（三等賞）	薩摩焼陶器各種
M38	1905	戦時記念博覧会（二等賞　有功銀牌）	薩摩焼各種
M38	1906	第十二回九州沖縄八県連合共進会（一等賞金牌）	菓子器

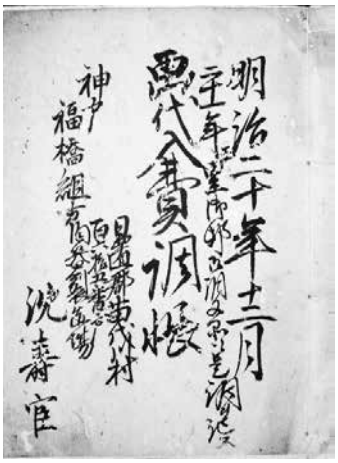
表３　十二代沈壽官受賞歴

挿図７　島津家家令内田政風書簡　沈壽官家文書

ちなみにこの書簡は、皇太后・皇后それぞれに錦手の薩摩焼が献上されたことを伝えるが、その四日前に行われた天皇の行幸の折にも薩摩焼花瓶一対が忠義から献上されていることから[8]、天皇への献上品も沈壽官窯で製造されたのではなかろうか。ともかくこの時点で、沈壽官は島津家にとって信用ある窯元になっていたとみてよい。また同年には第二回内国勧業博覧会が開催され、沈壽官は第二区美術部門において、「鳳凰形置物　遊船楽奏・宝船福神」で褒賞を受賞しており、国内的な評価も得ている。

明治二十年には、一月二十八日に急須一六揃、十錦画唐子一個、小すわり唐子二個など計十一件、二月二十四日に尺一寸角口耳付花瓶一対、犬置物一個など計八件、一月二十六日に上画唐子五個、稲三鶏置物二個など計四十四件、四月二十一日に尺二寸角口耳付花瓶六対、台子揃一揃など計十七件、四月二十五日に尺三寸帝形花瓶一対など計六一件、合わせて一四一件に上る製品を玉里邸に納めている。急須といった実用品も含まれるが、捻り物（フィギュア）や一対の花瓶といった奢侈品が大半を占めている。（挿図８）

この年は玉里島津家にとって、重要な出来事のあった年であった。玉里邸は島津忠義の実父である島津久光がその功績を認められて明治四年に新たに興した玉里島津家の邸宅である。玉里島津家では明治二十年の暮れに当主島津久光が亡くなり、十二月十八日に国葬され、翌二十一年一月、島津忠済が家督を相続した。沈壽官窯への大量の注文はちょうどこの家督相続のタイミングにあたっている。おそらくは、家督相続の贈答品として準備されたものではなかろうか。



挿図８　画代入費調帳
沈壽官家文書

このように十二代沈壽官は、島津家から重要な場面で依頼を受ける窯元という信頼関係を築いていた。ちなみに明治二十一年、島津忠義が沈壽官窯を訪問し、陶器窯や製造場を視察、数点を買上げている。こうした関係性を背景に、ニコライらへの贈呈品の製作が十二代沈壽官に依頼されたと考えられる。

（三）皇室と十二代沈壽官

先に述べたとおり、沈壽官は明治十四（一八八一）年に皇太后・皇后が袖ヶ崎邸を行啓した折に、島津忠義が献上した錦手陶器の製作を手がけた。この件を含め、沈壽官家文書から皇室への献上や売渡品についての記録を抽出したのが表４である。明治

和暦	西暦	事項
M14	1881	島津家袖ヶ崎邸へ天皇陛下の臨幸があった際、島津家より「御花生五対（桐二鳳凰麒麟浮上ゲ錦画付）、御香炉五個（桐二鳳凰麒麟浮上ゲ錦画付、その他数品を献上するにあたり作品を製造
M18	1885	御用品として、丈六尺（高さ180cm）の大壺一対（蓋獅子摑み薩摩固有ノ錦画菊ノ御紋付の製造を命じられ、買い上げられる
M21	1898	島津忠義が玉光山陶器製造場を訪問。陶器窯・製造場を視察し、数点買上げ
M26.12	1892	薩摩焼鳥籠外二品を長崎宮内大臣秘書官を経て御伝献を願ったところ、宮内省御用品として「菊花浮彫籠目彫刻錦手画付花生二対」、「香炉二個」の製造を命じられる。代金四百六十円で買い上げとなる
M26.8	1893	北白川宮殿下・妃殿下来県の折、休憩所として陶器製造場をご覧になる。製造・焼方などについて質問があり、人物置物その外数品を買上げ。大香炉・抹茶碗等を注文される
M27	1894	宮内省内匠寮より植木鉢製造の御用を命じられる
M28	1895	宮内省より大植木鉢製造の御用を命じられる
M28.9	1895	東園侍従が鹿児島県に出張の折、昼食休憩所として陶器製造場をご覧になる
M30	1897	宮内省よりお手元御用として高さ一尺の袋形人物浮上ゲサヤ形彫刻錦画彩色付一対の製造を命じられ、金百五十円で買上げとなる。 M317月29日　袋形浮彫花瓶一対　布袋二唐子浮上惣体サヤ形白地浮彫付　代金150円　M312月調製を仰せ付けられ、7月31日までに上納の契約であったが、9月30日まで延期をお願いしたい件を伝える手紙写
M31.12	1897	皇后宮職御用植木鉢及び一輪花生製造御用を命じられる
M31.12	1898	浮彫花瓶製作代金申出書　二十八円五十銭

表４　皇室への献上・売渡品

十八年には、御用品として丈六尺（高さ一八〇センチ）の大壺一対の製造を命じられ買い上げとなっている。この大壺には獅子形の摘まみのついた蓋がつき、薩摩固有の錦画菊の御紋付であった。この二作はニコライの来日以前のことで、皇室においても沈壽官の名は認知されていたことになる。

明治二十九年以降についてはニコライへの献上品製作の後のこととなるが、幾度も皇室への献上や買い上げ品の製作を手掛けている。これらに関連する記録の中には、宮内省土木課を窓口とした植木鉢や盆栽鉢の買い上げ記録も複数含まれている。

表4によれば、献上や買い上げなどを通して、沈壽官の作品が皇室に献上・買い上げられた機会は十回に上る。その数の多さは、国内外の博覧会などでの多数の受賞を反映するとともに、薩摩焼の窯元としての沈壽官の信用に基づいたものといえよう。

（四）十二代沈壽官の活躍

島津忠義はニコライ訪問の翌年、明治二十五（一八九二）年末にも、薩摩焼を贈呈したとされる。この年、ニコライの訪日中、接伴に関わった有栖川宮や島津忠義など約三十名にアレキサンドル三世から勲章が授与されている。[32] 推測の域を出ないものの、二度目の献上は、勲章の贈与に対するお礼だったのではなかろうか。「忠義公年表」によれば、忠義が白鷺大綬章を受け取ったのは同年四月のことである。[33] この年の二月四日付で、十二代沈壽官に対して磯島津邸執事より手紙が届いている。注文品があるため出邸を依頼する内容であり、細かな打ち合わせが必要な特別な注文品であることが想像される。この年に贈呈された薩摩焼については、製作者についても不明であるが、過去の注文の事例や島津家と十二代沈壽官の信頼関係、さらに明治二十九年のニコライへの献上品も沈壽官窯に依頼していることを考慮すれば、この時も沈壽官に注文された可能性は十分に考えられよう。

挿図9《色絵金彩菊貼付香炉・花瓶》皇居三の丸尚蔵館収蔵

そして、明治二十九年のニコライの戴冠式もしくは結婚式の折には、忠義から一対の蓋付壺が贈呈された。この作品は（図版2）来鹿記念の花瓶よりも大型で、さらに手の込んだ豪華な仕上げとなっており、明治期の薩摩焼を代表する作品の一つといえる。

ニコライへの献上品を手掛けた明治二十年代、十二代沈壽官は極めて充実した作品を残している。

明治二十六年に、宮内省の依頼を受けて花瓶一対と香炉一点からなる一組の薩摩焼作品を納入している（挿図9）。三点とも扁平な扁壺形をしており、器の表面には細かな籠目が施され、その上から胴を中心に首から裾にかけて手彫りの菊花彫刻で埋め尽くされるという精緻極まる作である。宮内公文書館が所蔵する明治期の宮内省に関する購入書類から、宮殿装飾用に宮内省が購入したもので、明治宮殿南溜の間のマントルピースに飾り置かれたことがわかっている。[34]

また同年にはシカゴで万国博覧会が開催され、沈壽官は優れた造形と焼成、装飾を評されて受賞した。出品作の一つである「色絵金襴手花卉文大瓶」（東京国立博物館蔵）

挿図10《色絵金襴手花卉文大瓶》東京国立博物館蔵
ColBase（https://colbase.nich.go.jp/）

（挿図10）は、事前に農商務省で開催された出品作品の陳列について取材した新聞記事において「陶磁器には数個の花瓶あれど、其内最も優れたるは鹿児島県沈壽官氏の花瓶（一対）なるべし」と絶賛された。[26]

このように明治二十年代の十二代沈壽官は世界的にも評価を受け、国内外で活躍をみせた。

（四）献上品の製作における島津家と十二代沈壽官

ここで、島津家と十二代沈壽官の動きに焦点をあてて、改めてニコライに贈呈された薩摩焼を振り返ってみたい。来鹿記念の花瓶製作の記録である「調帳」によれば、実際の製作にあたっては、沈壽官がたびたび磯島津邸を訪問していたことが窺える。海外の国賓に対する献上品の製作であり、かつ相手ごとに異なるデザインが採用されていることから、細かな打合せが行われたことは容易に想像される。花瓶にはそれぞれの国の国章の王冠デザインと各人のイニシャルが描かれているが、こうした情報は沈壽官窯では容易に入手し難かったと思われ、島津家から提供された情報をもとにデザイン化されたと考えられる。

胴部に描かれた桜と山吹は、マークが肩に入ることを意識しつつ、素地を大きく残したデザインとなっており、明治期の輸出品に多く見られる、テーマを江戸時代に通じる花鳥図に求めながらも、それをゴージャスな花束のように描き全体を華やかに演出する描き方とは明らかに異なっており、日本画をみるような落ち着きと風韻が感じられる。また、桜と山吹を組み合わせたモチーフは、管見では薩摩焼において他に例をみない。桜山吹図は咲きほこる春の情景である。日本では、桜が長く咲けば豊作になるといわれ、また、田植えの時期を知らせる花として五穀豊穣を表す意がある。平安貴族が庭に桜を植えて愛でるようになり、この頃から花といえば桜を指すようになる日本を象徴する文様である。一方、山吹は「万葉集」に詠まれ、「源氏物語」にも記されている事から、平安貴族たちが庭園に植えて観賞したことが知られている。こうした文様のもつ意味を踏まえた画題の選定には、島津家の意図が反映されているのではなかろうか。

では、蓋付壺はどうか。こちらにも国章の王冠とニコライのイニシャルが入れられている。壺の形には、茶の湯で用いられる葉茶壺が取り入れられている。葉茶壺は金襴の袋を口に被せ紐で結んで蓋とするが、その様子が彫刻によって表現され、金襴に相当する部分はあたかもそれを再現するような豪華な色彩の仕上げである。胴部には君子の品格を象徴する蘭、竹、菊、梅の四君子が、蓋と肩、裾には鳳凰が桐とともに描かれている。瑞兆である鳳凰は聖天子が即位すると姿を現すとされ、桐は鳳凰が宿る木として神聖視された。このように、蓋付壺には皇帝への贈り物にふさわしい画題が選ばれている。

このように献上された薩摩焼には単なる美しさに留まらない深い意味と心遣いが込められており、島津家と十二代沈壽官の両者によって生み出された苦心の作であったと考えられる。

おわりに

明治二十四（一八九一）年に皇太子ニコライが鹿児島を訪れたことをきっかけにした島津忠義とニコライとの親交の中で、二回に渡って贈呈された薩摩焼について、依頼者である島津忠義と製作を担った十二代沈壽官に視点を置いて論じた。

来鹿記念の花瓶は、結果的に訪日が叶わなかった弟ゲオルギーに贈呈された一対の花瓶のみが現存するが、製作に携わった沈壽官窯に伝来した下絵図と関連史料の検討から、ニコライ、ゲオルギオス、ゲオルギーの三名それぞれに対して花瓶一対が製作され磯島津邸で贈呈されたこと、そして確認できていない二組の花瓶の具体的な姿についても、推定を含むものの提示することができた。また、当時の沈壽官窯の経営状況の分析により、製作に用いられた原料や製造技術、そして作品の特徴に至るまでかなり実証的に浮かび上がらせることができたように思う。

とはいえ、忠義とニコライが磯島津邸で過ごした時間はわずか五時間に過ぎない。

この限られた時間の中でどのように友好が育まれ、その後の薩摩焼の贈呈につながったのか当初は不思議でならなかったが、論を進める中でニコライを迎えるにあたっての忠義の深い思慮と心を尽くした饗応があり、それを好感をもって率直に受け止めたニコライの姿が見えてきた。また、忠義が薩摩焼を贈呈品として選んだのには、当時、世界的に好評を博していた特産品という側面ばかりでなく、島津家が長い年月をかけて育んだ薩摩焼本来の美意識を伝え、ひいては島津家の格式と伝統を伝える意味も込められていたと考えられる。その製作を任された十二代沈壽官と島津家との間には、重要な場面で薩摩焼の製造を依頼されてきた実績に基づく信頼関係があったのである。

本稿をまとめるにあたっては、沈壽官文書の分析により明らかになった部分が大きく、貴重な史料の調査をお許しくださった十五代沈壽官氏に深く感謝申し上げますとともに、貴重な写真をご提供くださった関係各所に御礼申し上げます。

（ふかみなと・きょうこ　本館主任学芸員）

註

（1）「華麗なる薩摩焼―万国博覧会の時代のきらめき―」鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇一八年。筆者はこの展覧会を企画し、ニコライ二世ゆかりの薩摩焼等の現地調査を行う機会に恵まれた。本稿で取り扱う薩摩焼及び関連資料のほとんどは、同図録に掲載されている。

（2）辻岡健志「宮内省の外賓接待と大津事件―宮内省公文書類の生成・編纂を中心に」（宮内庁書陵部編『書陵部紀要』宮内庁書陵部、二〇一四年）によれば、ロシアのニコライ皇太子とギリシャのゲオルギオス親王の来日は、明治二十三年五月三十日に外務省より伝えられ、明治天皇へ奏上された。八月十三日には御沙汰により「帝室ノ貴賓トシテ御待遇」、いわゆる国賓の扱いとすることとなり、翌二十四年一月十二日には、有栖川宮威仁親王が接待掛に任命されている。ニコライの来日が国賓としての接待となった理由を、辻岡は「従前までの外賓と異なる大国ロシアの皇太子ということで、内閣制度後の日本にとって試金石となる外賓接待であった」ためであろうとしている。

（3）大津事件は、ニコライ一行が神戸港に上陸ののち京都に到着、五月十一日に遊覧のため滋賀県を訪れた帰途、大津を通過中に警護の巡査津田三蔵に切りつけられ負傷するという前代未聞の事件であった。

（4）玉光山陶器製造場は十二代沈壽官が明治八（一八七五）年に創業した、薩摩焼において最も早く民営で製造を始めた窯元である。沈家は、薩摩焼発祥のきっかけとなった豊臣秀吉の朝鮮出兵により薩摩に連行された朝鮮人陶工を初代とし、現在まで十五代を数える。

（5）沈家において沈壽官を名乗ったのは十二代当主の沈壽官が初めてである。現在の沈壽官窯に繋がる玉光山陶器製造場を創業したのが十二代であったことから、十三代以降代々が沈壽官の名を引き継ぐことが慣例となった。したがって、生前の十二代沈壽官は単に沈壽官と名乗っていたわけであるが、後代との混乱を避けるため、現在では十二代沈壽官と表記することが通例となっている。

（6）大津事件については主要な研究として、新井勉『大津事件　司法権独立の虚像』（批評社、二〇一四年）、新井勉『大津事件の再構成』（御茶の水書房、一九九四年）、長佐古猛『大津事件』（岩波文庫、一九九一年）、山岡良一『大津事件の再評価』（有斐閣、一九八二年）、社会問題資料研究会編『大津事件に就て』上・下（東洋文化社、一九七四年、安齊保『大津事件に就て』（思想研究資料　第65号）司法省刑事局発行、一九三九年）の復刻・再編）等がある。その他にもさまざまな視点から研究が重ねられており、例えば辻岡健志「宮内省の外賓接待と大津事件―宮内省公文書類の生成・編纂を中心に」（宮内庁書陵部編『書陵部紀要』宮内庁書陵部、二〇一四年）は宮内省の外賓接待の視点から大津事件について論じている。

（7）保田孝一『最後のロシア皇帝　ニコライ二世の日記』増補『朝日選書』四〇二、朝日新聞社刊、一九九〇年、四〇頁

（8）下絵図は沈家に伝わる大量の古文書の中に折り畳んだ状態で含まれており、十

五代沈壽官氏が私費を投じてそれらを修復された際に発見された。

(9) 紙片は、修復により額装された際に、画面の右下に貼りこまれた可能性が高い。

(10) 前掲註7、三七～三八頁

(11) 「露國皇太子ニコラス親王殿下ノ御来遊」『鹿児島市史』鹿児島市役所編纂、一九一六年、七三一頁

(12) 『世界の国旗・国章　歴史大図鑑』山川出版社、二〇一七年、一八一頁。この期間、ギリシャではクーデターにより専制政治を行っていたオソン一世が廃位され、ギリシアの保護国であったイギリス、フランス、ロシア列強の意向により、デンマークのグリュックスブルク王家から国王の二男をギリシャ国王ゲオルギウス一世として迎えた。国章にはグリュックスブルク王家の王冠が配されている。(「ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典」)

(13) 前掲註11、七一八～七一九頁。「露国皇太子ニコラス親王殿下同国ジョージ親王殿下及希臘国ジョージ親王殿下御一行来ル五月一日ヲ期シ長崎御来着伊万里有田辺御遊覧ノ後同五六日頃海路其県下鹿児島ヘ御渡航可相成筈」とある。(宮内省外事課往第一九号)

(14) 前掲註12、二三五頁。国章は頭に皇帝の冠を被り、さらに青いリボンのついた皇帝の冠を置いた双頭の黒鷲が配されている。

「ロマノフ家の最も価値ある遺産：皇帝の王冠をめぐる5つの事実」(『日本語翻訳版』、WEB版「ロシア・ビヨンド」二〇一九年八月四日付)によれば、この皇帝の冠とは、一七六二年にエカテリーナ二世の即位に当たって製作されたもので、その後ロマノフ朝の皇帝が戴冠式において代々この王冠で戴冠した。一八九六年五月十四日に戴冠式を行ったニコライ二世もこの王冠で戴冠している。また、モノクロではあるが実際の王冠の写真や、同王冠を被ったエカテリーナ二世らの肖像も掲載されている。

(15) 前掲註11、七一九頁

(16) 『国華』に掲載した際には、ゲネルギーとゲネルギネス頭文字が同じ表記になることのみ指摘したが、今回、通達にあるジョージ親王の表記に基づく可能性を加えて指摘した。

(17) 『H記』の中で、保田はエルミタージュ美術館において、「ニコライが鹿児島で忠義公からもらったとH記に書いている「ニコライの姓名頭字H・Λの組み合わせの文字を焼きつけている一尺ばかりの美しい薩摩壺」があることを確認した。」としている。これは蓋付壺を、来鹿記念の花瓶と誤認したものであり、また、「H・Λの組み合わせ文字」については、エルミタージュ美術館の研究員は「H」としており(前掲註1、二六〇「錦手四君子図茶壺形蓋付壺」解説、二二五頁)、筆者も同様に認識している。

(18) 前掲註1、二六〇「錦手四君子図茶壺形蓋付壺」解説、二二五頁

(19) 保田商店を経営した保田太吉は、横浜で薩摩焼を扱う陶磁器貿易商として知られた。明治二十六(一八九三)年に住吉町に開業し、いく度かの移転を経て同三十六年に堺町一丁目に移った。精巧な絵付けの製品から、粗雑さが見られる量産品まで製作している。沈壽官家文書の中には、保田太吉からの素地の注文書が多数含まれている。(『横浜・東京　明治の輸出陶磁器』神奈川県立歴史博物館、二〇〇八年、一〇五頁。前掲註1、二二六頁

(20) 『貞愛親王事蹟』伏見宮蔵版、一九二一年、一四一頁

(21) 前掲註7、一〇一～一〇二頁

(22) 前掲註7、四〇頁

(23) 沈壽官家には玉光山陶器製造場創業以来の経営資料を中心とした資料群が伝来しており、把握できているだけで約二千六百点に及ぶ。その中の古文書類を沈壽官家文書と称している。

(24) 前掲註11、「四月二十八日在長崎山内式武官ヨリ電報」七二六頁

(25) 尾佐竹猛著・三谷太一郎校注『大津事件　ロシア皇太子大津遭難』(岩波書店、一九九一年)には、「二尺ばかりの花瓶と一尺ばかりの皿」、早崎慶二著『大津事件の真相(復刻版)』(『近江文化叢書』二十八、サンブライト出版、一九八七年)

には「二尺八寸の花ビン、一尺の古皿など」とある。

(26) 前掲註11、七一八頁

(27) 『明治天皇紀』七、吉川弘文館、一九七四年、六四二頁

(28) 『官報』一二二九、「露国皇太子ハ来ル九月、君主但丁及バレスタインニ赴カレ大ヨリ埃及、印度諸港、支那及日本ヲ御漫遊ノ後来春西伯利ヲ経テ御帰国アラセラルヘシ（本月十二日倫敦発ルートル電報）」とある。

(29) 前掲註7、三五頁

(30) 拙著「沈壽官窯の職工一覧」『薩摩焼資料集　華麗なる薩摩焼の近代』鹿児島県歴史資料センター黎明館編、二〇一九年、四〇～四二頁

(31) 前掲註30、「薩摩焼の現状」『大日本窯業協会雑誌』二七二、八〇～八二頁

(32) 沈壽官家文書「焼物伝書」より作成

(33) 「沈壽官事蹟」「島津家史料」東京大学史料編纂所

(34) 前掲註11、前掲註6尾佐竹著に詳しい。

(35) 前掲註7、三五頁

(36) 前掲註11、七二九～七三〇頁。

『広辞苑』七版に、コサックとは「十五～十七世紀のロシアで、領主の苛酷な収奪から逃れるため南方やシベリア辺境に移住した農民とその子孫。のち半独立の軍事共同体を形成。騎兵として中央政府に奉仕し、ロシアのシベリア進出・辺境防衛に重要な役割を果たした。」とある。

(37) 前掲註7、三六頁

(38) 『明治天皇紀』七、吉川弘文館、一九七〇年、八一一～八一九頁

(39) 「日高宗高手記」島津家文書、東京大学史料編纂所蔵。日高宗高は幕末期の記録所職員。日高については、林匡「平田農高手記」と「御家譜編集一件帳」（『黎明館調査研究報告』二〇、二〇〇七年）に詳しい。

(40) 藤本和貴夫「シベリア鉄道と日本」（『ERINA REPORT』49、環日本海経済研究所、二〇〇二年）。臨時帝室編修局「御逸事一八」（識別番号二四三七六）において、明治天皇の「御逸事」として藤波言忠が「〇露国皇太子の御遭難　明治二十四年五月、露国皇太子、観光の為我が国へ御来遊あらせられたり、」と記している。（前掲註6、辻岡健彦著）

(41) 前掲註11、七三〇～七三二頁

(42) 松尾千歳「島津家武家故実の成立と展開　犬追物故実を中心として」、「尚古集成館紀要」四、尚古集成館、一九九〇年、一四・一七頁。ニコライ来鹿の折の犬追物の披露は、島津家にとって最後の張行となった。

(43) 前掲註11、七三〇頁

(44) 拙稿「薩摩藩による苗代川政策の実態について」朝鮮史研究会大会パネル発表、二〇一三年十月二十二日

(45) 前掲註30、拙稿「田之浦陶器会社・苗代川陶器会社について―藩窯から民営会社への転換―」

(46) 「薩摩焼伝来ノ畧記」「薩藩叢記」

(47) 「鹿児島縣窯業功績者行賞関係書類　明治十八年」白朴正伯至朴義通履歴書「薩陶製蒐録」

(48) 前掲註30、沈壽官家文書「明治五年萬留」

(49) 前掲註30、拙稿「沈壽官窯―玉光山陶器製造場の創業」、二八～二九頁

(50) 「島津忠義年表」鹿児島県史料「忠義公史料」七、鹿児島県維新史料編さん所、一九七五年

(51) 『明治天皇紀』五、一九七一年、二四四頁

(52) 忠義が授与された白鷺大綬章は、島津家の博物館である尚古集成館に所蔵されている。

(53) 前掲註50、九〇〇頁

(54) 宮内庁三の丸尚蔵館『明治美術の一断面―研ぎ澄まされた技と美』三の丸尚蔵館展覧会図録　八十二、二〇一八、四〇～四一頁

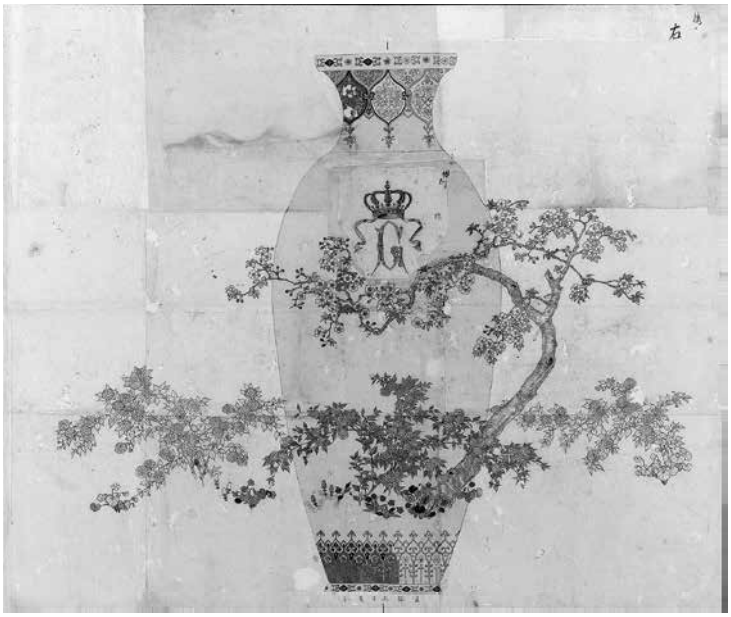
(55) 前掲註20、シカゴ万博関連資料一二八～一四六頁

図版1　十二代沈壽官作　錦手花卉文花瓶　エルミタージュ美術館

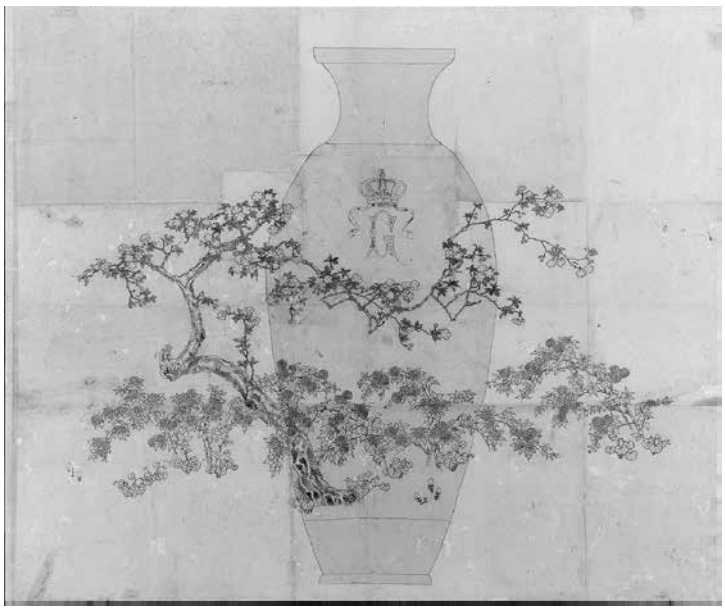
The State Hermitage Museum, St. Petersburg
Photograph © The State Hermitage Museum/photo
by Vladimir Terebenin, Alexander Lavrentyev

図版2　十二代沈壽官作　錦手四君子図茶壺形蓋付壺　エルミタージュ美術館

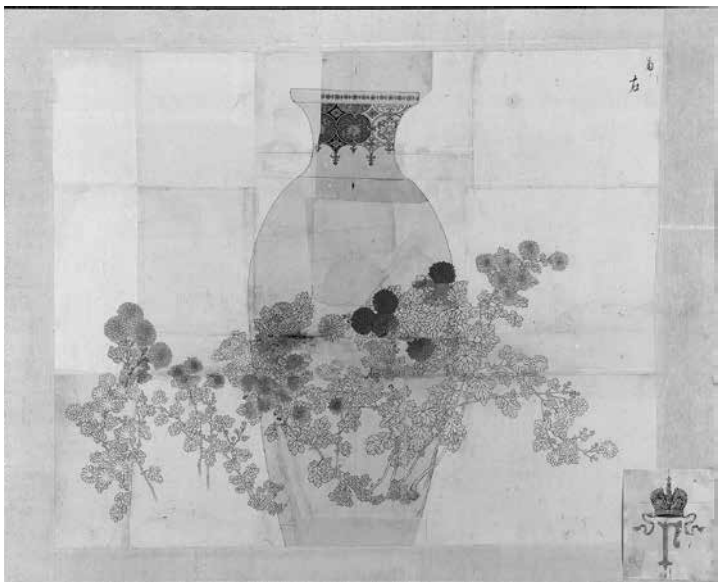
The State Hermitage Museum, St. Petersburg
Photograph © The State Hermitage Museum/photo
by Vladimir Terebenin, Alexander Lavrentyev



図版３　下絵図①「錦手桜山吹図花瓶（右）彩色下絵図」　沈壽官家文書



図版４　下絵図②「錦手桜山吹図花瓶（左）彩色下絵図」　沈壽官家文書



図版５　下絵図③「錦手菊図花瓶（右）彩色下絵図」　沈壽官家文書